

福山大学人間文化学部紀要
第一卷（二〇〇二）、61頁—78頁

陳後主をめぐる説話

— 隋遺録について —

久保卓哉

陳後主が張麗華、孔貴賓とともに、井戸に逃げ込んだ話は余りにも有名だが、唐代になるとその話が物語として小説に登場する。しかも、その小説は唐の僧侶が瓦棺寺の双閣から偶然発見した、唐の書家顔真卿が書写した軸物として登場する。しかもこの小説の作者は、顔真卿の曾祖父顔師古である。いわくのある書『隋遺録』について述べる。

（キーワード：唐代小説 宋詩話 隋遺録 大業拾遺記 韻語陽秋 陳後主 隋煬帝）

序

洛陽の芒山に葬られたと『陳書』は記す。

その後、後主は歴史から姿を消したのではなく、様々な説話に
よみがえる。あるいは隋煬帝の夢に亡霊として現れ（唐・顔師古
撰『隋遺録』）、またあるいは張麗華、孔貴賓が唐の進士顔濬の
前に現れる（唐・裴鉞『伝奇』）。こうした唐代の小説を素材と
して、『醒世恒言』巻二十四「隋煬帝逸遊召譴」（明・馮夢龍撰）
や、『情史』巻二十情鬼類「張貴妃・孔貴嬪」（明・詹詹外史撰）
が書きつがれ、陳後主は再びよみがえる。唐代以降のそれら文献
を整理すると次のようになる。そして本稿の目的は、最も年代の
古い『隋遺録』の検討にある。

陳後主が隋軍に追われて張麗華と孔貴嬪を伴って井戸に逃げ込
んだのは、禎明三年（五八九年）春正月二十日（甲申）のことで
あった。二日後の二十二日（丙戌）、晋王広（後の隋煬帝）が建
康の台城に入って、陳は滅亡する。

後主は春三月六日（己巳）、諸王百官とともに建康から北都長
安に入り、十五年後の隋仁寿四年（六〇四年）冬十一月二十日
（壬子）、洛陽でこの世を去る。時に五十二歳であった。亡骸は

『隋遺錄』	唐・顔師古	上卷	別名 『大業拾遺記』 『南部烟花錄』 『大業拾遺錄』 『南部烟花記』 『隋朝遺事』	叢書類 『百川學海』乙集 『說郛』卷七十八 魯迅『唐宋伝奇集』卷六
『隋煬帝海山記』	唐・闕名	下卷	『煬帝海山記』 『海山記』	『說郛』卷三十二、弓一百十 『古今逸史』逸記 『五朝小説』唐人百家小説偏録家 『古今説海』説纂部逸事家 魯迅『唐宋伝奇集』卷六
『伝奇』	唐・裴鉞	顔溶		『太平広記』卷三百五十 『類説』卷三十二 『說郛』卷四十五
『平陳記』	宋・闕名			
『脚家集』	宋・車若水	卷上		
『醒世恒言』	明・馮夢龍	卷二十四「隋煬帝逸遊 召譴」		
『情史』	明・詹詹外史	卷二十情鬼類「張貴妃 ・孔貴嬪」		
『隋煬帝艷史』	明・齊東野人	第十二回「会花陰妥娘 邀寵舞後庭麗華索詩」		

一 韻語陽秋

宋代の詩話、葛立方の『韻語陽秋』は、陳後主について言及する上でまことに勘所を押さえた記述をしている。

陳後主は、臨春、結綺、望仙の三閣を建て、華麗を極めた。

後主と張華麗と孔貴妃はそれぞれ其の一閣に住んで、狎客たちと詩を賦しては、相互に贈答し合い、とりわけ艶麗な詩を採って新声と評した。奢淫の極みというものだ。

隋が陳の台城を攻めた時、後主と張華麗、孔貴妃は座視するのみで策無く、遂に共に井戸に逃げ込んだ。それがいわゆる胭脂井だ。

唐・楊炯の詩に、

擒虎の戈矛 六宮に満ち

擒虎戈矛滿六宮

春花の樹に 秋風ふかざる無し

春花無樹不秋風

蒼黄として益ます見わる 多情の処

蒼黄益見多情處

同穴の甘心 井の中に赴く

同穴甘心赴井中

隋將韓擒虎の軍が宮城にあふれ、春の花をつけた樹に秋風が吹き付ける。

あわてふためく姿は益々あわれを増し、同穴の願いは井

戸の中に急ぐ。

とあり、李白も、

天子たる龍は 景陽井に沈み

天子龍沈景陽井

誰か歌わん 玉樹後庭花

誰歌玉樹後庭花
(金陵歌送別范宣)

と歌う。

今胭脂井は金陵の法宝寺にある。井戸の石の欄干に、赤い痕跡がありそれは紅の臙脂みたいだ。後主が張麗華、孔貴妃とともに流した涙が染みこんだ跡だという。石の欄干には後主の事跡が刻まれている。八分書の書体で、唐の大曆中の張著の文だ。また篆書の書体で、「戒哉戒哉」の数文字がある。これ以外にもたぐさんの題刻があるが、大部分は摩滅してよく分からない。寺のある場所はその景陽宮の土地で、井戸があり、訪問する好事家が絶えないので、寺僧はとても嫌がっている。宋の張芸叟(舜民)は僧をからかって、

馬嵬の襪たぶに及ばずも 不及馬嵬襪

猶お能く万金を致す 猶能致萬金

馬嵬の楊貴妃の足袋には及ばないが、それでも万金の恵みをもたらしている。

と歌っている。

(『韻語陽秋』巻第五)

これがその件りだが、葛立方が挙げた、臨春、結綺、望仙の三宮殿 / 張孔二妃、狎客との詩作 / そして胭脂井は、陳後主を表わすにもっとも關鍵となる事跡である。

敵正で精確に諸家の詩を評論した(『四庫全書總目提要』)と

いわれる葛立方は、唐・楊炯、李白、宋・張舜民の詩を陳後主をめぐる詩として挙げてはいるが、これは、唐宋において陳後主を詩題として詠む詩が多いということの意味している。唐詩でいえば、楊炯、李白の他に李商隱、許渾、羅鄴、貫休などが陳後主を歌う。

二 胭脂井

陳後主が張麗華、孔貴妃とともに逃げ込んだ胭脂井は別名景陽井、辱井といい、それは法宝寺にあったと『韻語陽秋』は記す。法宝寺と記す文献は、『韻語陽秋』の他に、南宋・王象之の『輿地紀勝』があり、その巻十七江南東路建康府に、「景陽井 …… 今胭脂井在金陵之法寶寺」とあり、その法宝寺は、「法寶寺 乃梁同泰寺也。今白蓮閣下有小池、面方丈餘。或云此乃陳景陽井也」梁の同泰寺のことと記す。

梁の同泰寺とは、梁武帝が大通元年（五二七年）に創立した同泰寺のことで、中大同元年（五四六年）に天火によってほぼ全焼し（『建康實錄』巻十七梁帝紀上高祖武皇帝）、修築する間もなく侯景の乱が勃発、その後楊吳時代の順義二年（九二二年）に敷地の半分は千福院が置かれ、南唐時代に浄居寺、圓寂寺に改められ、北宋になってそれが法寶寺となったという経緯がある（宋・張敦頤『六朝事迹編類』巻下寺院門第十一同泰寺、元・張鉉『至正金陵新志』第十一卷寺院同泰寺法寶寺）。

その後明の洪武二十年（一三八七年）、太祖朱元璋が明孝陵築造後に、同泰寺の跡地に寺院建立させたのが鶏鳴寺で、現在に至るまで南京市玄武湖畔にあって多くの参拝者を集めている。その鶏鳴寺の景陽楼の下の山麓に近年修復された胭脂井があり、横に「古胭脂井」と刻まれた石碑が立っている。



胭脂井と「古胭脂井」碑 「南京市文物事業管理委員会立
一九八四年三月」と刻す 鶏鳴寺境内にて 二〇〇〇年三月七日撮影

三 隋遺録跋文と魯迅の稗辺小綴

陳後主をめぐる小説としては唐の顔師古が撰したと伝えられる『隋遺録』がもつとも早い。魯迅は漢から隋にいたる小説集『古小説鈎沈』を編成したのち、唐宋の伝奇小説四十七篇を集めて『唐宋伝奇集』を編んだが、その第六卷に「隋遺録卷上 唐 顔師古撰」「隋遺録卷下 唐 顔師古撰」を収めている。

その『隋遺録』には無名氏の跋文があり、そこには唐の会昌年間上元県（南京）の瓦棺寺南隅の部屋からこの書が発見された経緯が興味深く記されている。跋文によれば、

右の『大業拾遺記』とは、上元県は南朝の古都で、そこに梁のとき瓦棺寺の閣を建てたことにはじまる。閣の南隅には二部屋があり、そこを閉めたまま歳月が経ちいつのまにか忘れられていた。唐（武宗）の会昌中（八四一〜八四六年）に仏寺を拆毀せよとの詔書^{まゐ}が発布されたので、二部屋が開けられた。すると、約千余りの荀筆^{まゐ}の書が見つかり、中に一帙の書があった。多くは損壊していたが、文字で値打ちがあるものは、『隋書』の下書きだった。その中に生の白藤紙の軸が数幅あって、『南部烟花録』と題されていた。僧の志徹がそれを手に入れた。種々の仏典が焚^{もや}されることになり、僧侶たちはその珍貴な軸を惜しみ、躍起になって紙面の末尾

を開いた。軸をよく見ると、いずれにも「魯郡文忠顔公」（顔真卿）の名があり、自らこれらを書き写したと題署されていた。これらは前の荀筆であることは、明白に知られた。志徹が以前の事を書いたものを得て、『隋書』と比べてみたところ、多くは隠語で、特にこじつけがあり、事柄が相当脱落していた。国初の文武百官は争って王道を輔政したから、顔公（顔真卿）は華麗奢靡な以前の事迹を良しとせず削除したのだろう。今堯風が回復し、天子は有徳の車に乗っている時世である。ただただこの書が湮滅して文人才子の話の種とならないのは惜しまれる。だから編纂して『大業拾遺記』とした。本文の欠落はおよそ七、八割あるが、それをすべて『隋書』によって補った。

とある。

これによれば、『隋遺録』は別名『大業拾遺記』といい、その元の名は『南部烟花録』であったようだ。魯迅の『唐宋伝奇集』には、校点を付した際に記して原書の出所を解説した『稗辺小綴』が巻末にあるが、その「隋遺録」の条で、

この書のもともとの名は『南部烟花録』で、再編されて『大業拾遺記』と呼ばれるようになった。今はまた『隋遺録』といい、跋文にそのことを言及してはいないが、おそらくは後の刻本者がそう改めたのだろう。

といい、また、歴代の書籍目録に見える例を挙げて、

この書は宋元の時代、既に相当に流行していた。『郡齋讀書志』（宋・晁公武撰）と『文献通考』（元・馬端臨撰）はともに、『南部烟花録』と著録し、『通志』（宋・鄭樵撰）は、『大業拾遺録』と著録し、『宋史』芸文志史部伝記類にも、顔師古『大業拾遺』一卷、とあり、子部小説類にはさらにまた、顔師古『隋遺録』一卷とある。

と、『南部烟花録』『大業拾遺記』『隋遺録』の三つの書名が流行していたことを指摘している。さらに魯迅は、この書が顔師古撰として伝わることに、

本文と跋文はことばの意味がおおざっぱで、双方とも一人の手で書かれたものようだ。しかもそれを顔師古に仮託したその方法は、葛洪の『西京雜記』を劉歆の『漢書』の遺稿から抜き出したものというのに等しい⁵⁶。しかし才識は遙かに劣り、疎漏の箇所はこのほか多く、あら探しをするまでもなく、それが偽託だということは分かる。

と、本物らしく見せるための跋文のからくりを『西京雜記』にもその例があると傍証し、本文は顔師古の著作ではなく、跋文を書

いた同一人物の手になるものであろうとほぼ断定している。

その跋文のなかで、唐の会昌中に僧の志徹によって瓦棺寺の双閣から発見された数幅の軸に「魯郡文忠顔公」と記されていたと書かれているが、「魯郡文忠顔公」とは魯郡公に封ぜられて諡を文忠といった顔真卿のことで、したがって軸に手写された『南部烟花録』は書家として名高い顔真卿の手によって書写されたものであったことになる。顔真卿にとって本文の撰者と目される顔師古は曾祖父にあたり、その五代の祖は『顔氏家訓』を著した顔之推だ。まことに由緒正しい因縁を記して本書の由来に箔を付けている。李劍国氏は『唐五代志怪傳奇叙録』（南開大学出版社一九九三年）のなかで、「跋文は顔師古の撰と明言しているわけではないが、顔師古も撰述に加わった『隋書』の遺藁の中に『南部烟花録』があつて、しかもその後裔の顔真卿が手写したものだ」と記しているから、これは顔師古の旧稿であると暗示している」のだと跋文のねらいを推測し、この書は顔師古生存中の貞觀十九年（六四五年）までの間に書かれたものではなく、晩唐の大中年間（八四七―八五九年）に書かれたものだ⁵⁷と論証している。

四 隋遺録 卷上

この書が顔師古の作によるものではなく、晩唐の大中年間の作であるとしても、陳後主を題材とした小説としては最初のもので

あることに変わりはない。その『隋遺録』とはどのようなものか、陳後主が登場する巻上の内容を紹介しておこう。巻

(隋煬帝) 大業十二年(六一六年)、煬帝は江都(揚州)に行幸しようとして、越王侑に東都(洛陽)の留守を命じた。*

* 歴史的事実としては、留守を命じられたのは越王楊侗で、

楊侑(後の恭帝)はこのとき代王。『隋書』巻四煬帝紀下

に、「大業十二年・秋七月・甲子、幸江都宮、以越王

侗・等総留守事。」とある。

宮女の半分は行幸に随従せず、争うように泣きながら帝を留めて、「遼東は小国で、わざわざ行幸なさるまでもございませぬ。どうか他の人にお行かせなさいませう。」と言ひ、車に手をかけて押しとどめ、指の血が鞅(むながい)車を引く馬の首にかける皮ひもを染めるほどだった。帝は思いを改めず、戯れに絹布に十字の詩を書いて留守をまもる宮女に与えて、

我夢江南好 我は江南の好を夢み

征遼亦偶然 遼に征くも亦偶然

但存顔色在 但だ顔色のみ存して在れど

離別只今年 離別は只だ今年のみ

わしは江南の美しさを夢に見、このたび遼東に行くのも偶然のこと。お前たちの心配そうな顔色があるが、離別は今年だけだよ。

と詠んだ。

帝の車は出立し、將兵百万が前を行く。大きな橋がまだできていないので、別に雲屯將軍の麻叔謀に、黄河を渡って汴水の堤に入れ、巨大な艦船が通れるようにするように命じた。麻叔謀は命令を引き受け、はなはだ過酷に鉄脚木鵝(水深測量器具)を使って水深を測り、木鵝が止まれば、河を渡る人が夫が忠誠ではないといつては、部隊を水の中で水死させた。今でも子供が泣いていても、「麻胡が来た!」と言ひのを聞けばすぐに泣きやむ。その流言がかくも人を畏れさせたのだ。帝が都を離れて十日のこと、宋の何妥が献上した牛車のところにおでましになった。車の前輪は高く広く、大きな釘が刃物となり、後輪は低く、柔らかい楡の木で造って、滑らかにひっかからないようにし、牛に御しやすくさせている。都から汴郡(開封)まで、毎日車に陪従する女がついた。車の帷帳には鮫翁の網を垂らし、玉片の鈴をつなぎ連ね、進めば玲瓏リンリンと美しい音、それが車中の談笑の声をやわらげて、周りに聞こえないようにと願っているかのようだった。

長安から車に陪従する娘袁宝兒が献納された。年の頃は十五、腰つきが細く柔らかく、艶めかしきことこの上ない。帝

はこよなくお気に召し格別な思い入れ。時に洛陽から蓊ふたつきの迎むか輦えん花（天子の車を迎える花）が捧げられ、「嵩山の小村で採りましたが誰もその名を知らず、採った者が珍奇なものと献納しました。」とのこと。ちょうどそこに帝の車がお越しになり、「迎輦」とお名づけになった。花の外側は深い紫、内側には白い脂が馥郁と香り、花粉をつけた薬しよの、その芯は深紅、花の萼がくは争って二つの花弁をつけていた。枝と幹は翡翠色で通脱木に似、棘がなく、葉は丸く長く薄い。その香りは馥郁として着物に染みこめば、数日消えず、嗅げば人を眠らせない。帝は（袁）宝兒にその花を持たせて「司花女」（花を持つ女）と呼んだ。そんな時帝は虞世南に命じて帝の側で「征遼の指揮德音の勅」（遼を征討する指揮と報償に関する天子の命令）を起草させていたが、宝兒はそれをずっと注視していた。

*虞世南：陳初から唐初の人。呉の顧野王に学を受け、文は

徐陵から高い評価を受けた。隋煬帝の大業中は秘書郎の任

にあり、煬帝からその才能を愛された。『旧唐書』巻七十

二、『新唐書』巻百二に伝がある。

帝は虞世南に言った。

「昔からの言い伝えによると飛燕*は掌の上で舞いが舞えたというが、朕はいつも、学者が表現を飾ったのであって、どうして人にそのようなことができようか、と思っていた。今、宝兒を手に入れてみると、まさしく昔の事

が明らかになった。しかし無邪気なしぐさが多い。今、お前を見つめている。お前は才人だ、あれをからかつて歌うがよい。」

*飛燕：漢・成帝の後、趙飛燕。漢の伶玄の作と伝わる『飛

燕外伝』に、「纖便輕細、举止翩然、人謂之飛燕」とある。

また『漢書』巻九十七下外戚伝孝成趙皇后に、「学歌舞、

号曰飛燕」とあり、顔師古は、「以其体輕故也」と注して

いる。趙飛燕を題材にした唐宋小説に、『飛燕遺事』（唐・

闕名撰）、『趙后遺事』（宋・秦醇撰）があり、唐・楊貴

妃のことを記した『楊太真外伝』（唐・竇史撰）巻上では、

『漢成帝内伝』を引いて、「漢成帝獲飛燕、身輕欲不勝風。

恐其飄蕩、帝為造水晶盤、令宮人掌之而歌舞」と描写して

いる。

虞世南は詔に応じて絶句を作った。

学画鴉*黄半未成 鴉黄を画くを学び 半ばにて未だ成

らず

垂肩た禪袖太慙生 垂れし肩 禪れし袖 太だ慙生なり

縁慙却得君王惜 慙おろに縁りて却って得る 君王の惜

み

長把花枝傍輦行 長く花枝を把りて 輦の行くに傍

う

額に描く黄粉の引き方を学んだのに、まだうまくできない。なで肩の指の先には袖が垂れ下がり、なんとも嬌痴あふれる姿。その痴態によってかえって帝の寵愛を得、いま花の枝を手に持ち、帝の車に寄り添っている。

*鴉黄：婦人の額に化粧する黄粉。六朝の女性は黄粉を額に引いた。軽黄ともいう。庾信の「舞媚娘」に、「眉心濃黛直點、額角輕黃細安」（眉心の濃黛 直に点じ、額角の軽黄 細く安らかなり）（『梁府詩集』卷七十三雜曲歌辭）とある。

帝は大変喜んだ。

汴郡に至り、帝は龍舟*に乗り、妃の蕭妃*は鳳舸に乗った。錦の帆と彩飾されたとも綱があり、贅沢を極めていた。

*龍舟：唐・杜宝の《大業雜記》船脚に、「隋煬帝江都に幸するに、洛口より龍舟を御す。高さ四十五尺、濶さ五十尺、長さ二百尺、分けて四重とし、上一重には殿堂有り、次ぎの一重には百六十房有り、下の二重には内侍及び船脚を安んず。船脚とは即ち水工の名なり」とある。

*蕭妃：煬帝の后妃。煬帝が晋王の時王妃となる。梁明帝の娘。『隋書』卷三十六后妃伝に、「后性婉順、有智識、好学解属文、頗知占候」とある。

船の前は舞台となっていて、舞台の上には日よけの簾が垂れ下がっている。簾は蒲沢国（陝西省）から献納されたもので、

山を背負うほど巨大な蚊の睫毛の糸と蓮根の糸とで、小さな珠玉を通して、睫毛の間に編み込んであるため、朝日が強く照っても、光は差し込んでこなかった。船ごとにすらりと背が高く色の白い美女千人を選んで、彫刻を施した板に金をちりばめた楫を取らせ、それを「殿脚女」と呼んだ。

*殿脚女：唐代小説の『隋煬帝開河記』（唐・闕名撰）には、「于呉越間取民間女年十五六歳者五百人、謂之殿脚女。至于龍舟御艤、即每船用彩纜十条、每条用殿脚女十人、嫩羊十口、令殿脚女与羊相間而行、牽之。」十五六歳の殿脚女を集めて船を引かせたことが描かれている。もともと、隋煬帝の大きな船を引かせる船工を殿脚女といった。『隋書』卷二十四食貨志に、「又造龍舟鳳舸、黃龍赤艦、樓船幾舫。募諸水工、謂之殿脚、衣錦行騰、執青絲纜挽船、以幸江都。」煬帝の江都行幸の際、龍舟、鳳舸などの巨船を殿脚に引かせたことが見える。

ある日、帝は鳳舸の上に登り、殿脚女の呉絳仙の肩によりかかった。その柔らかで美しいさまを喜んで、他の多くを寄せ付けず、その女だけを可愛がって、いつまでも歩を移さなかった。絳仙は長く美しい眉を描くのがうまかった。帝は我慢できず、車を回して絳仙を呼び寄せ、婕妤（帝の女御の称）の女官を授けようとした。ちょうどその時絳仙は玉工の万群に嫁いでいたため、気持ちが変わらぬことはなかった。帝は寝ようと思うことをやめ、龍舟の筆頭かじ取りに抜擢し、崆峒こうどう

夫人と名づけた。以来殿脚女たちは争って長い眉をまねした。内宮の官吏は日に螺子黛すしだい五斛を支給し、それを蛾緑がりくと呼んだ。

*螺子黛：眉を引く顔料。六朝では眉を緑色に染めることが

流行し、その風は隋唐においても衰えなかった。徐陵の

「雜曲」に、「綠黛紅顏兩相發、千嬌百念情無歇」（綠黛

紅顏 両つながら相い発（あらわ）れ、千嬌百念 情歌

（つ）くること無し）（『樂府詩集』卷七十七雜曲歌辭）とある。

螺子黛はペルシャに産し、一粒十金の値がした。後に賦税が不足し、銅黛を混ぜて支給したことがあったが、絳仙だけは螺子黛を賜わって途絶えることがなかった。帝はいつも簾によりかかって絳仙を見つめ、時が移っても離れず、内謁官をふり返ってこういった。

「昔から『秀色は餐くらうべきが若し』（美しい色つやは食

つきたいほどだ）（陸機「日出東南隅行」『文選』卷二

十八）というが、絳仙はまさしく飢えを癒すことができ
る」

そこで「持楫篇」（楫を持つ篇）の歌を吟じて、賜わった。

旧曲歌桃葉*	旧曲 桃葉を歌うも
新粧艶落梅*	新粧は 落梅よりも艶なり
将身倚輕楫	身を将 <small>も</small> つて 軽く楫に倚り
知是渡江来	知る是れ 江を渡りて来るを

古歌で晋の王獻之は自分の愛妾である桃葉の美しさを歌っているが、目新しいそなたの粧いは梅の花よりも美しい。そなたの身体がしなやかに楫にもたれかかっているのを見て、ああ河を渡って来たのだなと分かる。

*桃葉：樂府の吳声曲辭の名。『隋書』卷二十五行志上に、

「陳時、江南盛歌王獻之『桃葉』之詞曰『桃葉復桃葉、渡

江不用楫……』」陳の時、江南では盛んに王獻之の桃葉

の歌が歌われたとある。『樂府詩集』卷四十五吳声曲辭桃

葉歌に引く『古今樂錄』に、「桃葉歌者、晋王子敬之所作

也。桃葉、子敬妾名。縁於篤愛、所以歌之。」と桃葉は王

獻之の愛人の名で、それを歌ったものとある。

*落梅：梅花模様の化粧。『雜五行志』に、「宋武帝女寿

陽公主、人日臥於含章殿簷下、梅花落公主額上、成五出花、

弘之不去。皇后留之、看得幾時、經三日、洗之乃落。宮女

奇其異、竟效之。今梅花粧是也。」人日の日（正月七日）、

ぼかぼか陽気にうたた寝をしていた宋武帝の娘寿陽公主の

額に梅の花が落ち、払っても取れず三日間そのままだった

ことから、宮女たちがまねをして梅花粧をしたとある

（『太平御覽』卷三十時序部人日引）。『唐五代伝奇集』

に、「後世にいう花細、花子、眉子と同じ。種々の形に切

り抜いた花模様を肩間に貼った。唐の李復言の『統玄怪録』定婚店に、『其肩間、常貼一花子、雖沐浴閑処、未嘗去。』とある。」という(二三三頁。中州古籍出版社一九九七年)。

帝はこの歌を千人の殿脚女に歌わせた。時に越溪から耀光綾が献上された。その絹織物の模様には突起があり、美しく光彩を放っていた。それは、越の人が順風に乗って、石帆山の下で舟を浮かべ、野生の繭を取って糸練りをしたことがあったが、そのとき、糸練り女が夜見た夢の中に仙人が現れて、

*越溪：越国の美女西施が紗(うすぎぬ)を洗った所。李白

は五言古詩「西施」で、「西施越溪女、出自苧蘿山。秀色

掩今古、荷花羞玉顔。……」(西施は越溪の女、出自は

苧蘿山。秀色は今古を掩い、荷の花も玉顔に羞す。……)

と歌っている。

*石帆山：浙江省紹興の東にある山。山の東北に、帆のよりに孤立した岩がある。謝靈運の『遊名山志』に、「破石溪の南二百餘里に、又石帆有り。脩廣と破石と度を等しくす。質色も亦た同じ。傳えて云う、古え人有りて破石の半を以て石帆を為ると。故に名づけて、彼を石帆と為す。」

(『藝文類聚』卷八山部下石帆山引)とある。

「禹穴は三千年に一度開かれる。お前が取った繭は、江淹の詩文集の中の紙魚が姿を変えたものだ。その糸で着物をつくれば、きつと奇妙な花紋があらわれよう。」

と語る夢をみたことがあった。織ると果たして夢の通りであつ

たたため、それを帝に献上したものだ。帝は着物を司花女の袁宝兒と殿脚女の呉絳仙にだけ与え、他の姫女には賜らなかった。蕭妃がそのことを怒って嫉妬し喜ばなかったため、二人は次第に帝の寵愛を受けることがなくなった。

帝はいつも酔っていくつかの宮殿で遊んだが、たまたま宮婢の羅羅という女性と遊んだ。羅羅は蕭妃を畏れて、帝をよう迎え入れず、月経で身体がすぐれないと断り、帝の側に寝ることをよしとしなかった。帝はからかって、

箇人無頼是横波 箇人無頼にして 是れ横波

黛染隆顛簇小蛾 黛染の隆顛に 小蛾簇がる

幸好留儂伴成夢 幸いに好く儂を留むれば 伴に

夢を成すに

不留儂任意如何 儂を留めず任意は如何

あの人はする事もなく流し目を送るばかりで、小さな蛾が群がったみたいにおでこに黛を引いている。うまく行けば私をそこに留めて共に同じ夢をみるのに、私を留めないとはどんな気持ちなの。

と詠んだ。帝が広陵(揚州)に行つて以来、宮中に呉の方言をまねる者が多かったため、「儂」という言葉を使ったのである。

帝は放心状態がゆゆしくなると、往々にして妖鬼に惑わされた。呉公宅鶏台（揚州）に遊んだ時、夢うつつのうちに陳後主と遇った。後主は依然として帝を「殿下」と呼んだ。後主は薄絹の黒い頭巾をかぶり、青いゆるやかな袖、長い裾の着物を着、緑の錦で縁取りした紫の紋がはいった平草履をはいていた。舞姫が数十人、左右に並んで待っていた。その中の一人は極めて美しく、帝はしきりにその女性を見た。すると後主が言った。

「殿下はこの女をご存じではないですか。張麗華です。桃葉山（六合県）の前を戦艦に乗って麗華とともに北へ渡ったことをいつも思い出します。あの時麗華が最も忘れられないのは、臨春閣にもたれて東郭婉（すばしこい兔）の紫毫筆をためして、つやのある赤い絹に、尚書令江總の「璧月」の句に答える詩を書いていた時でした。詩詞がまだ終わらないうちに、韓擒虎が青白混毛の駿馬を躍らせ、大軍を擁して一気に突撃したため、まったく居所がなくなり、今日に至っているからです。」

すぐに緑の模様のある法螺貝に、紅梁の新醸造酒を酌んで帝に勧めた。帝はそれを飲んで大変喜び、そして麗華に「玉樹後庭花」の舞を舞うようにと頼んだ。麗華は長い間放って置いたし、井戸の中から出てきて、腰や手足が受け付けず、もはや昔の姿はありませんと固辞した。帝が再三求めたので、ゆるやかに起ち上がり、一曲舞った。

後主は帝に、

「蕭妃（煬帝の妃）はこの女と比べていかがですか」と訊ねた。帝は、答えた。

「春の蘭、秋の菊は、それぞれの季節の美しい花だ」
後主は又詩数十篇を賦したが、帝は心にとめず、「小窓」の詩と「侍兒碧玉に寄す」詩だけを好んだ。（後主の）「小窓」の詩にいう。

午睡醒来晚 午睡して 醒め来たるや晚し

無人夢自驚 人無く 夢に自ら驚く

夕陽如有意 夕陽に 意有るが如し

偏傍小窗明 偏こまごまに傍りて 小窓を明らす

昼寝をして日暮れ時に目覚めたが、あたりに誰もいず今見た夢に自分が驚いたようだ。見ると夕陽が、心があるかのように、わざと近寄って小窓を照らしている。

「碧玉に寄す」詩にいう。

離別腸猶断 離別は 腸の猶断たれるがごとし

相思骨合銷 相思は 骨の合まぎに銷けるがごとし

愁雲若飛散 愁雲 飛散するが若くも

凭仗一相招 凭たより仗なって 一たび相あい招かん

お前との離別を考えると腸がちぎれる思いがし、相い思
うと骨がいまにも溶けそうになる。

愁いを含んだ雲が遠くに飛び去っていくかのようだが、
なんとかしてもう一度わたしのもとへ招きたいものだ。

張麗華は帝に拝礼して、一篇を求めた。帝はそれはできない
と断った。麗華は笑いながら言った。

「此処不留儂 此処に儂を留めずも、

会有留儂 会ずや儂を留む処有らん

(いまここでわしを受け入れなくても いつかきっと

わしを受け入れるはずだ)

と、かつて聞いたことがございますのに、どうしてでき
ないと仰れるのですか」

帝は強いて麗華のために詩を作って言った。

見面無多事 見面 多事無く

聞名亦許時 名を聞くも亦許時ぞ

坐来生百媚 坐来 百媚を生じ

実箇好相知 実に 好き相知なり

あなたと顔を合わせる機会は多くない、名を聞いても時
はいくばくもない。

あなたは坐っているだけで艶めかしく、まことにわたし
のよき友人。

* 百媚：宋・賀铸の詞「点絳唇」に、「見面無多、坐来百媚
生餘態。後庭春在。折取残紅戴。小小蘭舟、盪槳東風快。
和愁載。纏絲難解。不似羅裙帶。」とある。

麗華は詩をおしただいたが、顔をしかめて喜ばなかった。
後主は帝を問いただした。

「龍舟での遊びは楽しいですか。始めは殿下の治世は堯舜
の上をいくと思っておりましたが、今日このような遊び
に耽っておられるとは。およそ人は皆生まれながらにして罪
の深いことでしょうか。あの三十六の封書は今に至るも
わたしを快々として楽しませません。」^{註①}

帝は忽ちはっと目覚め、叱りつけて、

「どうして今日なおわたしを殿下というのだ、昔の事を思
い出させてわたしを責めるつもりか」

と言うと、その声とともにふうっと消えた。

五 隋遺録の文学性

これが陳後主が登場する巻上の内容だが、『隋遺録』は隋煬帝
の大業十二年、煬帝が江都（揚州）に行幸したときのことを記し

たもので、後主が主役ではない。だが後主と張麗華を描写した小説的構成は、色彩豊かな映像で見るかのごとくに描かれ、後の一連の煬帝・後主説話の本話となっている。

例えば、後主の登場はまことに具体的でその姿が目の前に浮かぶ。亡国の極みに向かう晩年の後主の姿はこんなものであったのか。薄絹の黒い頭巾をかぶり、青の緩やかな袖と裾の長い着物を着、緑の錦織に紫の紋をあしらった草履をはいた姿は、後主の栄華と没落を象徴する。一方では又、煬帝の前に登場した張麗華の美しさを、帝はしきりにその女性を見た、と目の動きだけで表現し、具体的な描写を排除した妙。文の冗長さは消え、見る煬帝とその視線を受ける張麗華と横でそれを見守る後主の、三人の心理が静かにしかし緊迫を伴って伝わってくる。しかもそれが煬帝が精神的に放心状態（「昏漚」）に陥った時の夢うつつの中に、夢幻の妖鬼（「妖崇」）として登場する。これは幽明二界の二層構造であり、また、既に鬼籍に入った後主が亡霊として、放心状態で昏乱している煬帝の精神に入り込むという、幽魂幽界の二重構造である。更に、悦楽と逸遊によって亡国に至った後主が、河を開き迷楼を建て贅の限りを尽くして放逸する煬帝の夢に現れて忠告をするという、猟奇趣味をおおる配役の妙。後主と張麗華の逸楽の史実と胭脂井に逃げ込んだ史実を語ることによって、煬帝、後主、張麗華の会話に現実味を与え、読み手に幽界の出来事であることを忘れさせる、文学的手法の巧みさ。

こうした『隋遺録』の文学性を魯迅は『中国小説史略』第十一

篇宋之志怪及伝奇文のなかで、

其叙述頗陵乱、多失実、而文筆明麗、情致亦時有綽約可觀覽者。

その叙述は、かなり混乱していて、真实性に乏しいが、文体は華麗で、情趣もしばしば魅惑的で鑑賞に堪える。

とその文筆情致のすばらしさを評価している。また、李劍国氏も前掲の書で、『隋遺録』は唐人の作であると論証した後に、

中多綴歌詩、計煬帝八首、虞世南一首、吳絳仙一首、陳後主一首、詩筆明淨麗婉、兼陳隋之輕綺、唐人之清俊。才人美女相对必賦詩吟歌、意尽方休、全係唐人作風。（『唐五代志怪伝奇叙録』五六二頁）

『隋遺録』に見える詩歌は、陳隋の輕艶綺美と、唐人の清華俊秀を兼備した見事な文学作品であると評価していて、いわば衆目の一致する所なのだ。

六 隋遺録の後主の詩

宋・阮閲の『詩話総集』は、『隋遺録』の抄文を採録して、『隋遺録』に見える詩歌を紹介しているが（前集丙集紀実門中）、

『隋遺録』の後主の詩は六朝人の作ではなく、唐人方域の作であるとする北宋・蔡居厚（字は寛夫）『詩史』の説を挙げている（前集甲集博識門）。『詩史』は次のようにいう。

『南部烟花録』文理極俗、又載陳叔宝詩云、「夕陽如有意、偏傍小窗明。」此乃唐人方域詩、非叔宝作、兼六朝人大抵不如此。唐芸文志載『烟花録』乃記広陵行幸事、此本已無、唐末人擬作此書爾。

後主の「小窗」詩の「夕陽如有意、偏傍小窗明」は、六朝人が為しえる詩句ではなく、唐の人、方域が作ったものだという。宋・姚寛の『西溪叢語』はその説を支持して、確かに「六朝の詩語ではない（六朝詩語不如此）」（巻下）と補完し、『全唐詩』もそれを受けて巻七百七十五に、方域の「失題」の詩一首として収め、「一作陳叔宝詩」と注記している。ただし、唐の方域がどのような詩人であるのか、『詩話総龜』にも『西溪叢語』にも記述はなく、又現存の史伝にもその名は無く詳細は分からない。しかしながら『詩史』、『詩話総龜』、『西溪叢語』の宋代詩話がこぞって唐・方域の詩として疑念をはさんでいないことからすると、当時「夕陽如有意、偏傍小窗明」と歌う「小窗」の詩は、唐・方域の詩として人口に膾炙していたに違いない。

だが、しかしながら南開大学の李剣国氏は『唐五代志怪伝奇叙録』のなかで、宋・釈惠洪の詩話、『冷齋夜話』に、「小窗」の

詩は陳後主作の詩であると考えている記述があると指摘している（同書五六三頁注①）。その釈惠洪の『冷齋夜話』は、「五言四句の詩 天趣を得たり」と題して次のようにいう。

吾弟超然、喜論詩、其為人純至有風味、嘗曰、「陳叔宝、絶無肺腸、然詩語有警絶者。如曰、『午醉醒未晚、無人夢自驚。夕陽如有意、偏傍小窗明。』王維摩詰、中山詩曰、『溪清白石出、天寒紅葉稀。山路元無雨、空翠湿人衣。』舒王百家夜休日、『相看不忍発、慘愴暮潮平。欲別更攜手、月明洲渚生。』此皆得于天趣。」（巻四）

釈惠洪の弟で、味わいのある詩論を展開する超然が、天趣（天然の情趣）を得た詩として陳後主の「小窗」の詩一首と王維の詩二首を挙げている。特に陳後主は、「絶えて肺腸無し、然れどもその詩語は警絶なる者有り」骨太いところは全く無いがその詩語には目を見張るものがあると評論して、「小窗」の詩をその例証に挙げる。この文脈からすると、釈超然は「小窗」の詩を陳後主の真作の詩と見なし、兄である『冷齋夜話』の撰者釈惠洪も当然それを認めていたわけだ。

当時この釈兄弟の理解も存在していたことからすれば、宋代において「小窗」の詩は、唐・方域の作とする説と、陳後主の作とする説との二つが並存していたことになる。ここでにわかに「小窗」詩の作者の謎を解き明かすことはできないが、この詩には軽

綺麗な色合いと私たちの目を見張らせる（警絶）趣きがある。いまいちどそれを鑑賞しておこう。

小窗

小窗（小窓）詩の小窓とは、明かりを採り入れるための円や菱形に切られた窓のこと。

午睡醒来晚

午睡して 醒め来たるや晚し

今見た夢に驚いて、昼寝から目覚めたところ、

無人夢自驚

人無く 夢に自ら驚く

辺りに人は誰もいなくて、静まりかえっていた。

夕陽如有意

夕陽に 意有るが如し

だいぶ眠ったのだろう、部屋の中には日暮れの気配がた

だよっている。

偏傍小窗明

偏ひとかりに傍ちかよりて 小窗を明てらす

ふと見ると、夕陽に心があるかのように、わざと小窓に

近寄って来て照らしている。

へ 注 へ

注①：拙稿「六朝末帝陳後主伝論―亡国のレクイエム―」古

田敬一教授頌寿記念中國學論集、汲古書院、一九九七年、二二七頁参照。なお、『全唐詩』や『歴代詩話』の用例を検索するには、

北京大学中文系が作成し提供する電子文献検索サイト「全唐詩電

子検索系統」があり利用価値が高い。

注②：唐の武宗は会昌五年八月に「仏寺を毀し勅しいて僧尼を還

俗せしむ制」を発して、天下の寺院四千六百余所を壊し、男女の僧侶二十六万五百人を還俗させ、招提、蘭若四万余所を壊させた。

これは中国仏教史上に四度にわたって行われた「三武一宗」の法難の一つである。三武とは、北魏の太武帝、北周の武帝、唐の武宗で、一宗とは、後周の世宗をいう。

注③：李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』（南開大学出版社一九九三年）は、『郡齋読書志』、『五色線』巻下、『白孔六帖』巻十

四に、それぞれ「筍筆」として引かれていることを挙げ、「筍筆」よりも「筍筆」の方がよいと指摘している（下冊五五七頁）。ち

なみに、『郡齋読書志』巻二上雑史類は、「『南部烟花録』一卷・僧志徹得之于官閣筍筆中」とし、『白孔六帖』巻十四筆硯十六

は、「瓦官筍筆」（瓦棺寺の筍筆）と題してこの跋文を引いている。筍筆とは、筍たけのこ形の穂先の筆のことをいう。なお、『五色線』

巻下の「瓦棺筍筆」の文は、『魯迅全集』（学習研究社刊）第十

二巻「古籍序跋集」『唐宋伝奇集』稗辺小綴第六分注③に小南一郎氏の訳がある。

注④：『西京雜記』の末尾には葛洪の跋文があり、そこには、

「洪の家に劉子駿（歆）の『漢書』一百卷がある。試みに班固の

『漢書』と比較検討してみると、班固はほとんどすべて劉氏の書から取っており、少しの異同があるだけだった。班固が取らなかつたのは、二万字ばかりである。いま、その二万字ばかりの中から抄出して二巻とし、『西京雜記』と名づけて『漢書』の欠を補う。」とあることを指す。

注⑤：李劍国前掲書、下冊五五八—五六〇頁に、宋以来の偽作説を詳細に挙げた上、さらに自説を展開して補完した詳しい論証がある。

注⑥：唐宋の伝奇小説を翻訳したものに、『唐宋伝奇集』吉川幸次郎訳・東京弘文堂・世界文庫・一九四二年（後）、『中国古典小説集』筑摩書房・世界文学大系七十一に収める）、『唐代伝記集』（1）（2）前野直彬編訳・平凡社・東洋文庫、『六朝唐宋小説選』前野直彬編訳・平凡社・中国古典文学大系二十四、『唐宋伝記集』（上）（下）今村与志雄訳・岩波文庫などがあるが、『隋遺録』は翻訳されていない。魯迅の『中国小説史略』第十一篇「宋之志怪及伝奇文」に『大業拾遺記』（『隋遺録』）が紹介されており、『隋遺録』の原文が一部引用されている。『中国小説史略』の翻訳としては、『中国小説史』上下・増田渉訳・岩波文庫、『中国小説史略』上下・今村与志雄訳・『魯迅全集』第十一巻学習研究社・筑摩書房・ちくま学芸文庫、があり、魯迅が引用した『隋遺録』の抜粋が翻訳されている。

なお、『隋遺録』の底本として、魯迅輯『唐宋伝奇集』（魯迅全集第十巻・人民文学出版社・一九七三年）を用いた。また、読解する上で『唐五代伝奇集』李格非・呉志達主編 中州古籍出版社一九九七年を参照した。

注⑦：『南史』巻十陳本紀下に、「隋文帝は晋王広（煬帝）を元帥にして八十の総管を統轄させて陳討伐を進めた。そして璽書（玉璽を押しした詔勅）を送って、陳後主の二十悪を暴き、さらに詔書を書き写して三十万枚複写して、あまねく江南の内外に広めた。」とあることをさす。陳後主の二十悪には、「宝衣宝食、窮奢極侈、淫声楽韻、俾昼作夜。斬直言之客、滅無罪之家、剖人之肝、分人之血。欺天造惡、祭鬼求恩、歌舞衢路、酣醉宮闈。」などが連ねられていた。（『隋書』巻二高祖紀下）。

注⑧：王維の詩二首を、『全唐詩』巻百二十八は「闕題二首」として収めている。

久保卓哉

A Story Around *Chen Hou Zhu* 陳後主

— about The Novel of *Sui Yi Lu* 隋遺錄 —

Takuya KUBO